

## 海軍 艦艇部隊

### 戦艦「鹿島」に乗艦して

兵庫県 藤井 進

大正十一（一九二二）年八月、神戸市林田区東尻池町に生まれ、真野小学校を経て、昭和十二（一九三七）年、若松高等小学校を卒業しました。

神戸三菱造船所の造機検査課に勤務、昭和十七年七月、徴兵検査を受け、甲種合格して、翌昭和十八年八月、大竹海兵団に入団しました。

翌日、防府海軍通信学校入校を命ぜられ、約六カ月の普通科で暗号教育を受け、卒業しました。同時に、軍艦「鹿島」の乗り組員となりました。

軍艦「鹿島」は輸送船隊の旗艦として種々の軍

需物資を輸送する任務でした。諸物資を積み込み、沖繩に向けて出航中、大時化に遭遇することも度々で、甲板に大波が押し寄せ、艦は上下左右に揺れ、このため、最初は船酔いをして食事も進まず苦労しました。それにも次第に慣れてきました。舟山列島に着いて、上陸したときは、陸地の有り難さをつくづく味わいました。

台湾に行ったとき、帰りの艦内は居住区もなくなるほど砂糖を山のように積み、釣り床も使用できずに、砂糖の上で雑魚寝をする有様でした。

呉軍港に帰港し、呉軍需部に大量の砂糖を運び込むのは「ダルマ船」で、その荷揚げが終わり、艦内の兵隊には一人八キロほどの特配があり、大変嬉しかったものです。

それで呉の港町の下宿に、その砂糖を持ち込んで、次の上陸のときに「せんざい」などを作ってもらうことを楽しみにしていたのですが、予定が変更となり、戦友に食べてもらったという残念な思い出がありました。

次に台湾へ行ったとき、台中市が爆撃を受けて、パイン缶工場が被害を受け、「鹿島」の乗員が、その後片付けの応援に行ったことがありました。

航海中は敵機の警戒、潜水艦の見張りを行うなど、毎日が戦闘態勢で、少しも気の緩むことはありませんでした。

当時、艦艇が瀬戸内海を航行して、四国の讃岐の金比羅さんの沖合いを通過する際には、皆から集めた金を醤油の空き樽に入れて、海上に投げ入れる習慣があるようです。その樽は土地の漁師が拾い上げて、賽銭として金比羅さんに奉納するという慣わしです。「鹿島」でも、そのことを行いました。

海軍の食事、中でも味噌汁はうまく、「海兵団

の味噌汁はうまい」と当時は評判でした。海軍の味噌汁がなぜうまいか？ などとは考えたこともなかったのですが、今にして思えば、うまいはずである。特別の味噌を使っていたわけでもなく、材料にしても家庭のものと少しも代わったところはなく、ただ食べさせる時間が決まっていたということだけでした。

味噌汁に限らず、吸い物にしても、食事時間がおいしく食べてもらうポイントになっていました。いやいやながらの「飯炊き」作業にも、いつの間にか叩き込まれた心得でした。

「味噌汁を沸騰させる奴があるか！」と殴り飛ばされ、「切り身の魚に水をかける奴があるか！」と張り飛ばされる、というように、いつとはなしに海兵団で、うる覚えではあるが教育されていた料理の基本のようなのを思い出していました。

特に海兵団の場合、軍艦の場合と比較すると、食事時間が正確で、右舷も左舷も同時に食事を取ることができた点があります。軍艦の場合は、当

直と非番が、どうしても別に食事を取らなければならぬ、だから後のものは料理が冷めてしまう。

私は新兵当時、飯炊きの手伝いを一年半ばかりやったことで覚えたものです。

私たちの艦内では、航海中の朝食は、主として食パン半分と味噌汁、大スプーン二杯程度の砂糖を使用することができました。そして航海に出るときは、呉の軍需部から米や野菜、玉ねぎ、キャベツ等を補給することができましたが、陸軍部隊の食糧不足の話とは、思いもよらないことで、海軍では不足はなかった。同じ海軍でも、陸に上がった海軍陸戦隊は大変であったと思う。

艦内には鼠や油虫が多く、鼠一匹捕ると一日上陸する許可が出ます。油虫は百匹で入温上陸が許される。一生懸命探して、捕まえて、上陸したところなど、楽しかったこともありました。

終戦の直前には、能登半島の突端の入り江に「鹿島」をつなぎ、約一時間、小船で七尾まで行き、上陸したことがありました。八月十五日、能登半

島の入り江に停泊中の当直勤務時に、終戦の暗号文が着信、全文を翻訳して艦長に報告しました。

私は、能登半島より呉軍港に上陸、復員準備をして、九月十五日に帰路につきました。そのとき、ほかの兵隊が、島の子供に小石をぶつけられました。子供でも負けるとは思わなかった悔しさがありません。残念ではありますが、それが理由だったかもしれません。残念ではありませんが、日本の国民すべてのものが、何のためか、こんな馬鹿な戦争をしたのだろうか、誰の責任だろうかと思うほどでした。

今の平和日本の有り難さは、若い世代の方々は、これが当たり前だと思わないで、六十年前は大変であったことを、知ってほしいのです。

同時に、二度と戦争はしてはならないことを伝えたいものです。

私は、九月十五日、呉から国鉄の各駅停車で帰りましたが、その途中、広島市を通過する際には、車窓全部が締め切りになっていました。当時、原爆被害の跡を見るのは禁止であったからです。

姫路駅に到着して、改札口を出ると、乗車証明書  
書の持参によりフリーパスでした。姫路の町は、  
駅前をはじめすっかり焦土と化しており、大変驚  
きました。姫路城は、その姿を残していて、焼け  
跡に一本の煙突が異様に目に付きました。それは  
銭湯の焼け残りでした。町の住宅跡はブロック塀  
が崩壊し、水道の蛇口からは水が出っぱなしで駅  
前通りは哀れな姿でした。

復員の時、水兵姿で、約十キロの衣囊を背負い、  
衣類、米などを担ぎ、姫路市砥堀の実家まで六キ  
ロの道をとほと歩きながら、実家はどうしたか、  
不安な気持ちでした。姫路市野里の陸軍兵舎跡近  
くの家まであと二キロの地点で、通り過ぎるタク  
シーの運転手から「兵隊さん、良かったら乗って  
ください」といわれて、戦争が終わった直後の荒  
廃した中で、人情ある人との出会いが、大変嬉し  
く思い出されます。

戦争で亡くなられた多くの方々の、ご冥福をお  
祈りいたします。

## 艦船護衛 その生と死

石川県 島野 広

私は大正十三（一九二四）年十月一日、石川県  
石川郡石川村字水島（白山市水島町）で父利吉の  
三男として生まれました。家業は農業で水田三町  
歩を耕作、四人兄弟の三番目でした。家は自作農  
家として恵まれた家庭に育ちました。父はかつて  
は陸軍の現役兵として輜重連隊に勤務、金沢の最  
初の第九師団長の従卒を拝命した、二期間勤務の  
模範兵でした。また長兄は近衛第一連隊に勤務し  
ていました。

昭和十六（一九四一）年十二月八日の大東亜戦  
争開戦時は石川県立松任農業学校在学中でしたが、  
最初の繰上げ卒業となり、残り三カ月の授業料を  
前納して、慌しく同年十二月二十三日に卒業とな  
りました。

昭和十七年五月一日、在学中に受験しました海